

中国語母語話者に対する 「は」と「が」の指導法

—主題・主格の日中対照研究による—

徐 一琳

キーワード

「は」と「が」・主題・主格・中国語母語話者・日中対照研究

0. はじめに

中国語母語話者にとって、「は」の用法はとりわけ難しい。中でも、「は」と「が」の使い分けは、日本語学習の最大の難関の一つであると言っても過言ではなく、初級学習者から上級学習者まで、数多くの誤用が見られる。

日本語と中国語は系統の異なる言語で、中国語に助詞のような働きをするものがないことが、「は」と「が」の習得を困難にしている主要な原因の一つである。しかし、「は」を指標とする成分(=主題)、そして「が」を指標とする成分(=主格¹⁾)と同じ機能、意味特徴を持つものは、中国語にも存在する。中国語の主題と主語²⁾は、日本語の「は」と「が」のようなマーカーによって明確に示されることが少ないので、その区別も意識されにくい。そして、中国語における主題の研究はまだ日本語のように多くなく、その成果も教育に応用されていないため、中国語母語話者の主題と主語に対する認識は曖昧である。それらを概念化せずに日本語の学習を始めると、「は」と「が」を指標とする成分の区別が日本語特有の現象であると誤解してしまい、中国語との対応関係を正確に認識できないことが多い。その結果、「は」と「が」の機能・用法が正しく理解できず、上級段階に到達しても誤用を重ねがちである。

本稿では、まず、日中両言語における主題・主格の研究史を比較し、その共通点と相違点を見出した上で、問題提起をする。そして、「Xは」、「Xが」に対応する中国語表現をこれと比較し、両者の対応状況を明らかにする。この分析結果を利用し、中国語母語話者の日本語作文に現れる「は」、「が」の用法に関連する誤用の原因を究明し、その防止法についても考える。さらには、現在中国で広く使われている日本語教科書を分析し、根本的な解決法を探り出し、今後の教科書における「は」と「が」の提示・説明方法を提案したい。

1. 日中両言語における主題・主格の研究史の比較

日本も中国も、西洋文法を無批判に輸入し、自国の最初の文法体系を築いた。日本は『広日本文典』で、中国は《馬氏文通》であった。しかし、西洋文法をそのまま日本語、中国語に当てはめると当然不都合が生じ、どうしてもうまく分析できない文法現象が現れる。日本語では、「東京の都は面積広く、人口多し。」のような、いわゆる総主文、中国語では、「鸡，我不吃了。」のような、動作の対象が文頭に位置する文が最初に注目された。このように、文頭の名詞句をめぐって、日本の言語学界では「総主論争」が、中国の言語学界では「主賓³⁾論争」が展開されていた。

日本では、総主論争の後、総主の概念が、主題や題目などに発展し、問題の焦点も「は」と「が」の文法的意味の違いにだんだん絞られていった。三上章の題述理論によって、「は」の文法的意味が解明され、主題は新しい文法カテゴリーとして確立された。その後、主題構文のより精密な分類や、「は」の機能の研究が盛んに行われ、今日まで続いている。

一方、中国では、「主賓論争」の後、主語と賓語に対する認識が深まり、主題の概念も現れたが、長い間「主題主語一致論」が支配的であった。しかし、機能主義の観点から主題を主語と区別する研究が行なわれたことを契機に、主題と主語を語用論と文法論で区別することが主張されるようになった。中国語は、形態的特徴が乏しく、主題の認定が極めて難しいため、その文法的機能が認められつつも、意見の分かれるところも多く、まだ文法カテゴリーとして確立したとは言えない。

上述のように、日本語と中国語における主題・主格の研究は、同様に出発したが、専用のマーカーを持つ日本語とそれを持たない中国語は、全く違う発展を見せている。このような主題の表し方の違いやそれによる研究の進捗具合の差異から、両言語における共通点が見えにくくなり、それらに対する理解を妨げていると思われる。

2. 主題・主格の日中対照分析

2.1 主題を表す手段について

野田(1996)によると、主題を表す手段は、多くの言語に共通していて、主に下記の三つがある。

- ①語順——主題の成分をほかの成分より前におくこと
- ②音声——主題の部分とほかの部分を区切るポーズをおくこと
- ③形態——主題に主題を表すマーカーを付けること

本稿では、これを基準に主題を判定することにする。なお、本稿で扱う主題は、文レベルのものが中心であるが、文章・談話的視点も取り入れることにする。

2.2 「Xは」、「Xが」とその相当中国語表現

格成分の中で、主格「Xが」が一番主題化されやすい(=「Xは」になりやすい)ことは、多くの研究によって証明されている。三上(1960)には、「「Xハ」は、「Xガ」を代行する場合が最も多く、したがってよく知られています」との記述があり、野田(1996)にも、「動作やできごとの主体を表す「～が」は、格成分のなかで、もっとも文の主題になりや

すいものである」と指摘している。

- (1) a 父がこの本を買ってくれた koto
b 父は、この本を買ってくれました。(三上 1960)
- (2) a 象の鼻が長くある koto
b 象の鼻は、長い。(三上 1960)
- (3) a Aさんが学生である koto
b Aさんは学生だ。(菊地 1995)
- (4) a 自然界に多糖類がたくさんある koto
b 多糖類は、自然界にたくさんあります。(三上 1960)

(1)~(4) では、(1) b~(4) bの「父は」、「象の鼻は」、「Aさんは」、「多糖類は」がそれぞれ (1) a~(4) aの「父が」、「象の鼻が」、「Aさんが」、「多糖類が」を代行し、文の主題になっている。(1)~(3) は、「Xが」が元々文頭に位置し、主題化されても語順は変わらないが、(4) のように「Xが」が文中にある場合は、主題化されると語順が変わり、「Xは」が必ず文頭に立つ。このように、「Xが」の主題化は、形態的手段(「が」を「は」に変えること)と語順的手段(Xを文頭に移動すること)によって実現される。

一方、中国語では、動作・状態の主体を表す成分(=主語)は、普通、述語動詞の前に位置する(存現文⁴⁾の場合は述語動詞の後に来る)。望月(1999)、施(2001)などによると、中国語の主語は、日本語の「Xが」と同様に、ほかの成分より文の主題になりやすい。

- (5) a 张老师教我们汉语(这件事⁵⁾ (※張先生が私達に中国語を教えている koto)
b 张老师教我们汉语。(張先生は私達に中国語を教えている。)(刘ほか 1991)
- (6) a 这个孩子很可爱(这件事) (※この子がかわいい koto)
b 这个孩子很可爱。(この子がかわいい。)(刘ほか 1991)
- (7) a 他是我的老师(这件事) (※その方が私の先生である koto)
b 他是我的老师。(その方は私の先生です。)(刘ほか 1991)
- (8) a 桌上有文件(这件事) (※机の上に書類がある koto)
b 文件在桌上。(書類は机の上にある。)(『中日辞典』)

※は、対応する日本語文が筆者の訳であることを示す。以下、同じ。

(5)~(8) では、(5) b~(8) bの「张老师」、「这个孩子」、「他」、「文件」が文の主題と見ることができる。しかし、(5)~(7) では、aとbの文頭名詞句は、同じ形態を取っているため、bの文頭名詞句が主題であるとは断定できない。この場合、表記だけでは判断できず、実際に発音される際の音声によるしかない。例えば、(5) bの「张老师」と「教我们汉语」の間にポーズが置かれる場合は、「张老师」が主題であると分かる。また、中国語では、(5) bのような文は、「张老师(啊),(他)教我们汉语。」というふうに、主題の後にモーダル助詞「啊」、ポーズのマーカー「,」や主題の代わりに代名詞「他」などが表記されることもある。こうした場合は、「张老师」が文の主題であると判断できる。また、

(8) aのような存現文の「文件」が主題化されると、(8) bのように文頭に立ち、語順が変わるので、主題であることが分かる。

以上のような分析結果は、以下の対訳例⁶⁾からも分かるであろう。

- (9) 一个铁路工人瞪了我们一眼。(《插队的故事》)
 ひとりの鉄道労働者がわれわれを睨みつけた。(『遙かなる大地』)
- (10) 这两天病人很多。(《人到中年》)
 このところ患者数が激増していた。(『人、中年に到るや』)
 この二、三日患者がたいへん多い。(『北京の女医』)
- (11) 远处的红楼是我们的学校，我们的教室。(《插队的故事》)
 遠くに見える赤い建物が私たちの学校、私たちの教室だった。(『遙かなる大地』)
- (12) 她酸溜溜地看着挂在墙上的我和孙悦的结婚照。(《人啊，人》)
彼女は嫉妬心をまる出しにして、壁に掛けたおれと孫悦の結婚写真を見ていた。
 (『ああ、人間よ』)
- (13) 北国的冬天多么冷啊！(《人到中年》)
北国の冬は寒い！(『人、中年に到るや』)
北国の冬の寒気は厳しい！(『北京の女医』)
- (14) “你是我们医院的支柱，是中华医学的新秀！”(《人到中年》)
 「君はわが病院の大黒柱だ、中華医学界のホープだ！」(『人、中年に到るや』)
 「君はわが医院の柱石だ、中華医学界のニューホープだ！」(『北京の女医』)

(9)～(14)の中国語原文の文頭名詞句は、全て動作・状態の主体を表すもので、それらの形態も全く同じである。しかし、日本語に訳されると、(9)～(11)のように、「Xが」に訳される場合と、(12)～(14)のように、「Xは」に訳される場合とがある。したがって、中国語の主語と主題は、文中における位置と形態が同じである場合が多いことが分かる。

ただし、以下の対訳例のような存在の主体を表す名詞句が主題であるかどうかは、日中両言語とも弁別しやすい。すなわち、日本語では「Xが」か「Xは」によって区別でき、中国語では、(15)の「小卖部」などのように文中に位置するか、(16)の「氏家喜助的妻玉枝的坟」のように文頭に位置するかによって異なる語順を取るからである。

- (15) 「スキイ場に売店があるでしょう？」(『雪国』)
 “滑雪场里有个小卖部吧。”(《雪国①》)
 “滑冰场⁷⁾不是有个卖东西的店面吗？”(《雪国②》)
 “滑雪场上不是有个小卖店么？”(《雪国③》)
- (16) 氏家喜助的妻玉枝的墓は、福井県南条郡竹神村の氏家家の墓所にある。(『越前竹人形』)
氏家喜助的妻子玉枝的坟，筑在福井县南条郡竹神村氏家家族的坟地里。(《越前竹偶》)

以上から分かるように、中国語の動作・状態の主体を表す成分は、語順と形態から、主

題であるか、主語であるか弁別できないことが多い。そのため、中国語母語話者の主題、主語の区別に対する意識が曖昧であり、日本語の「Xは」、「Xが」との対応関係が十分に認識できないのである。中国人日本語学習者にとって、文頭名詞句に「は」をつけるか、「が」をつけるかが難しいのは、ここに起因しているであろう。

日本語の「Xは」、「Xが」に対応する中国語表現から、はっきりした形態上の違いを見出すのは至難である。しかし、中国語にも主題が存在する以上、その機能、意味特徴は、日本語と共通すると考えられる。三上（1960）が指摘するように、主題「Xは」は文末まで係る働きを持ち（更に、「ピリオド越え」の機能も持つ）、主格「Xが」はこのような働きを持たない。中国語の主題、主語にも同様な特徴があることを意識すれば、「は」と「が」の習得状況を改善できるのではないか。以下、中国語母語話者の日本語作文に見られる誤用例を分析し、その原因と解決法を考えたい。

3. 中国語母語話者の日本語作文による誤用分析

3.1 分析対象

ここで分析対象とする誤用例のデータは、『日本語学習者による日本語作文とその母語訳との対訳データベース（ver.2 正式公開版）』⁸⁾より収集する。本データベースには、①日本語学習者による日本語作文、②作文執筆者本人による母語訳（またはもっとも楽に文章を書ける言語への翻訳）、③日本語教師による作文の添削、④作文執筆者・添削者の言語的履歴に関する情報、が集められている。

筆者は、中国語を母語とする日本語学習者の作文を抽出し、その日本語作文と作文の添削⁹⁾に基づき、「は」と「が」の混同による誤用例を収集する。また、執筆者が日本語作文で表現しようとしている意味を確認するために、その中国語訳も参考にする。

3.2 「Xは」と「Xが」の混同による誤用例の分析

まず、「Xが」を「Xは」と間違えた例を観察してみよう（aを日本語作文から抽出したものの、bを作文の中国語訳から抽出したものの、cを作文の添削から抽出したものとし、各例文の後には、そのデータベースにおけるファイル名を記す¹⁰⁾）。

- (17) a * 人間はタバコを吸う原因としては、体の適性が考えられます。(cn012j)
 b 说起人们吸烟的原因，可以想到人体的适应性问题。(cn012m)
 c 人間~~は~~ [が] タバコを吸う原因としては、体の適性が考えられます。
- (18) a * もし人人は自分の権利だけ重視したら、全社会はどのようになりますか？
 (cn058j)
 b 如果每个人都只重视自身权利，那全社会会变成什么样？(cn058m)
 c もし人人 [人々] ~~は~~ [が] 自分の権利だけ重視したら、全社会はどのようになりますか？(cn058ns2)

(17) a、(18) a と (17) b、(18) b を比較すれば分かるように、(17) a、(18) a の文頭名詞句「人間」、「人人」は、従属節に入るべき成分で、文の主題にはなれない。しかし、

(17) a、(18) aでは、これらの名詞句に「は」を付けて、文の主題にしてしまっている。次に、逆の場合、つまり「Xは」を「Xが」と間違えた例を挙げることにする。

- (19) a *たばこを吸うことが自分自身のことではなく、人間全体のことです。(cn038j)
 b 吸烟不是自己一个人的事，而是人类的事。(cn038m)
 c たばこを吸うことが[は]自分自身のことではなく、人間全体のことです。
- (20) a *これがもう中国人の風習になってしまったのであり、中国の古い時代からのことである。(cn052j)
 b 这早已成为了中国人的一种风俗，是从很早以前流传下来的。(cn052m)
 c これが[は]もう中国人の風習になってしまったのであり、中国の古い時代からのことである。

(19) a、(20) aと(19) b、(20) bを比較すれば分かるように、(19) a、(20) aの文頭名詞句「たばこを吸うこと」、「これ」は、文末の「人間全体のこと」、「中国の古い時代からのこと」まで係っており、文の主題にすべきである。しかし、(19) a、(20) aでは、これらの名詞句に「が」を付けて、文の主題にしていない。

以上のような、「Xは」と「Xが」の混同による誤用の原因は、学習者が「は」の主題を表す機能に対する理解が不十分であることと、日中両言語のこの種の主題構文の対応関係に対する認識の曖昧さにあると考えられる。

前述のように、「Xが」とそれが主題化された「Xは」は、中国語では、文の同じ位置に同じ形態で現れることが多く、主語であるか主題であるか弁別しにくい。そのため、中国語の主題と主語の区別を全然あるいははっきり意識していない学習者が多いと思われる。このような、中国語の主題に対する認識の曖昧さが、日本語の主題のマーカー「は」に対する理解を妨げ、「は」と「が」を混同してしまう原因になっているのである。

以上のような混同を防ぐために、これまでは、従属節には「は」が入らないという説明がされてきた。しかし、それを知識として覚えていても、学習者には、日本語の従属節そのものの判別が難しく、実際に作文する際はこの知識が応用できないものである。また、外国語としての日本語の主題感覚を日本語で理解させることも、学習者にとっては、容易ではない。このような誤用を避けるためには、筆者は、学習者に中国語の主題についての基本知識を持たせなければならないと考える。(17) b、(18) bの文頭名詞句「人们」、「每个人」など、(19) b、(20) bの文頭名詞句「吸烟」、「这」などの直後に、ポーズや「啊」などのモーダル助詞を入れて、それが主題であるか主語であるかテストして判別すれば良い。(17) b、(18) bのように、ポーズやモーダル助詞が入ると文が成立しなくなる、あるいは意味が大きく変わる場合は、「人们」、「每个人」などが文の主題ではないと判断でき、その日本語の相当語句には、「は」が使えないことが分かる。逆に、(19) b、(20) bのように、ポーズやモーダル助詞が入っても、文が成立し且つ意味が変わらない場合、「吸烟」、「这」などが文の主題であると判断でき、その日本語の相当語句には、「は」を使うべきであると分かるのである。

「Xは」と「Xが」の混同による誤用には、以上のようなもののほかに、文法的には正しいが、文章・談話の中においては適切ではない例も多く見られる。文章・談話の中の

「は」と「が」の使い分けは、情報の既知・未知や確定・不確定など、たくさんの要素と関わりがあって、かなり複雑である。本論の趣旨と違うところもあるので、ここでは詳述しない。

以上の分析から分かるように、「は」と「が」の混同による誤用は、日中両言語の主題に対する意識の低さと主題構文の対応関係に対する認識の曖昧さに起因している。これらは、根本的には、中国人日本語学習者が、母語である中国語の主題を概念化するのに慣れていないことによるであろう。このような誤用が多発するのは、中国語の主題の概念がまだ学校文法に取り入れられていないことが大きく影響しているほか、現在中国で使われている日本語教科書における「は」と「が」の提示・説明方法に問題があるからである。中国語母語話者の「は」と「が」の誤用を減らすためには、このような問題を発見し、改善する必要があると考えられる。

4. 中国で使われている日本語教科書の分析および提案

4.1 分析対象

ここでは、《中日交流标准日本語》初級上・下、中級上・下（人民教育出版社 1988 年版）と《新編日本語》第一冊～第四冊（上海外语教育出版社 1993 年版）の 2 種類を分析対象とし、係助詞「は」、格助詞「が」に関連する文法説明の部分を中心に観察する。なお、上記教科書において、「主語」という術語が使用される場合は、「主語」の語と用いることとする。

4.2 日本語教科書の分析①

《中日交流标准日本語》（以下、《标日》）は、日本語を専門としない学習者向けの教科書で、中国国内で自習用書としてもっとも普及している。《标日》の初級上・下と中級上・下全 4 冊を調べたところ、「は」と「が」についての説明は、初級上に集中している。

《标日》初級上では、係助詞「は」は、第 1 課の文型「甲は乙です」に初めて出てくるが、「句型、语法解说（※文型・文法の解説）」には、中国語の「甲是乙」に当たると説明し、助詞「は」の表す意味については触れていない。しかし、同じ第 1 課の「词语与用法说明（※言葉と用法の説明）」の中には、会話における主題の省略について、以下のように説明している。

☆《标日》初級上 第 1 課 (P38)

4 主語の省略

在日语中由于谈话的情景或上下文的关系，谈话人明确了解主语的时候，可以把它省略。
（※日本語では、会話の状況、あるいは、前後の関係から、話し手が明らかに主語を理解している時には、それを省略することができる。）

- ｝ わたしは 会社員では ありません。
- ｝ （わたしは） 学生です。
- ｝ 王さんは 中国人です。
- ｝ （王さんは） 日本人では ありません。

ここから、例文の中の「わたしは」、「王さんは」を主題ではなく、主語と説明していることが分かる。

また、「第1単元（第1課～第4課）小结（※第1単元のまとめ）」の「助詞小结（※助詞のまとめ）」には、「は」の機能・用法について、次のようにまとめられている。

☆《标日》初級上 第1単元小结（P86）

助詞	作用	例 句
は	提示主題 (※主題を提示する)	●わたしは 田中です。 ●デパートは あそこです。 ●明日は 土曜日です。 ●田中さんは 働きません。

前記の第1課の説明と違って、ここでは初めて「は」の機能を「主題を提示する」と説明し、「わたしは」、「デパートは」、「明日は」、「田中さんは」を主題と分析している。しかし、第1課で言う「主語」とここで言う「主題」とは、どこが違うかはっきり分らない。これでは、主語と主題が同一概念であるとしか理解し得ない。

格助詞「が」の説明箇所も見てみよう。格助詞「が」は、第5課に初めて出てくるが、「句型、語法解説（※文型・文法の解説）」の中では、次のように解説している。

☆《标日》初級上 第5課（P94）

- 6 甲が ～から 来ます。
助詞“が”表示甲は主語、甲表示“谁”来。
(※助詞「が」は甲が主語であることを示し、甲は「誰」が来るのかを示している。)
●お客さんが アメリカから 来ます。

ここの説明には、格助詞「が」は、主語を表すと書かれている。ここで言う「主語」は、どういう意味であろうか。前記第1課で言う「主語」と同じものであると理解するならば、「は」と「が」は、同じ意味を表すことになってしまうのである。

また、「が」の機能・用法については、「第2単元（第5課～第8課）小结（※第2単元のまとめ）」の「助詞小结（※助詞のまとめ）」では、次のようにまとめられている。

☆《标日》初級上 第2単元小结（P141）

助詞	作用	例 句
が	動作主体	●お客さんが アメリカから 来ます。

第5課の説明と違って、ここでは、「が」の機能を「動作の主体を表す」としている。ここの「動作の主体」と前述の「主語」の区別は、学習者自身が推測しなければならないになってしまう。

以上見てきたように、《标日》初級上における「は」と「が」の用法についての文法説明では、「主題」、「主語」、「動作主体」などの用語が厳密に使い分けられていない。そのため、解説が矛盾・混乱しているところが多く、主題と主格の概念が混同されていると見なければならない。結果としては、冒頭から学習者（独学学習者）に、この二つの概念が

同じものであるという印象を与えてしまう可能性が高いと思われる。

《标日》初級上に見られるこれらの問題点は、主題と主格の区別の説明を避けようとし、用語の選択に迷った結果、発生していると考えられる。その区別の説明を避けたい理由としては、主題と主格の違いを理解するのは日本語を専門としない初級学習者にとって難し過ぎる、限られた紙面では解説しきれないなど、いろいろ考えられる。また、当時の中国では、中国語の主題の概念がまだ広く認められておらず、主題構文の類型化などもなされていなかったことも、《标日》における「は」と「が」の提示・説明方法に影響しているものであろう。

4.3 日本語教科書の分析②

《新編日語》(以下、《新日》)は、日本語を専門とする学習者向けの教科書で、中国の大学の日本語学科で広く使われている。《新日》の第一冊～第四冊を調べたところ、「は」と「が」についての説明は第一冊に集中している。

係助詞「は」は、第二課の文型「…は…です」に初めて出てくるが、「解説」には、次のように説明されている。

☆《新日》第一冊 第二課 (P28)

一、…は…です

これはふくです。

日語句子一般可分主題部和叙述部两大部分。主题部包括主题和对主题的修饰、补充部分。主题表示讲话的中心事项或范围，是一句话的题目、话题。叙述部是对主题部进行必要的叙述或说明，核心是谓语。

(※日本語の文は一般に主(題)部と述部といった二部に大別される。主(題)部は主題及び主題の修饰、補充部分を含む。主題は話題の中心事項あるいは範囲を表し、一文の題目でもあり、話題でもある。叙述部は主題にとって必要な叙述、あるいは説明を行っており、述語が一文の中心となる。)

「は」是提示助词，读作「わ」。「は」可以提示各种句子成分。在这个句型中，「は」接在名词后面提示主题。「です」是助动词，表示对某个事物和状态的断定。「…は…です」相当于汉语的「…是…」。

(※「は」は提示の助詞で、「わ」と読む。「は」は各種の文成分を提示することができる。こうした文型の中で、「は」は名詞の後に接続し、主題を示す。「です」は助動詞で、ある事物と状態に対する断定を示す。「…は…です」は中国語の「…是…」に相当する。)

○これはちずです。(这是地图。)

○それはでんわです。(那是电话。)

ここの第一段落「日語句子……核心是谓语。」は、日本語の構文についての基本知識の紹介としても、「は」の導入としても、適切であると思われるが、題述関係が中国語と異なる日本語の構文的特徴であるというようにも読み取れる。

第二段落では、「は」の機能について、種々の文成分を提示できると説明した後、文型「…は…です」では「は」が名詞の後に来て主題を提示すると曖昧な解釈をし、この名詞がどのような文成分であるかに触れていない。

格助詞「が」の説明箇所も見てみよう。格助詞「が」は、第二課と第八課に出てくるが、第十課の「単元のまとめ」に、各種の助詞の用法が表にまとめられているので、格助詞「が」の部分掲げておく。

☆《新日》第一册 第十課 (P181 ~ 182)

種類	作用	例 句
格助詞「が」	主語	教室にだれがいますか。
	客観描述 (※客観叙述)	花がたくさん咲いています。

ここでは、格助詞「が」の用法を「主語を表す」と「客観的に描写する」としているが、同じ視点で区別しているとは言えない。動作との意味関係から見れば、「だれが」も、「花が」も主語であり、文の表現機能から見れば、どちらも客観的な描写だからである。

《新日》では、日本語の文法知識をテーマ別にまとめて紹介している。第十五課の「単元のまとめ」には、日本語の文成分についての知識が載せられている。日本語の文成分には、「主語 (主語)」、「謂語 (述語)」、「定语 (連体修飾語)」、「状語 (連用修飾語)」、「宾语 (目的語)」、「補語 (補語)」、「対象語 (対象語)」があると紹介している。ここから、主題を文成分として捉えていないことが分かる。また、「主語」については、次のように説明する。

☆《新日》第一册 第十五課 (P279)

(1) 主語 (主語)

主要用主格助詞「が」来表示。用主谓关系的句子做连体修饰语时, 主语常由助词「の」表示。
(※主として格助詞「が」により示される。主述関係を持つフレーズを連体修飾に用いる時、主語は助詞「の」によって示されることも多い。)

○学生たちが映画を見ている。

○試験の始まるベルがなりました。

除「が」「の」之外, 提示助詞「は」和「も」有时也提示主語。另外, 有的句子可以省略主語, 有的句子无主語。

(※「が」「の」以外、提示助詞「は」および「も」も場合によっては主語を示す。そのほか、文によっては主語が省略されたり無主語の文であったりする。)

ここでは、主語が「が」によって示されると説明した後に、「は」と「も」も主語を提示することがあると付け加えている。この説明から、主題を、文成分を代行するのではなく、提示するものと見なしていることが分かる。したがって、《新日》では、主題を、主語などの文成分と違う次元のものとして扱っており、文法論のカテゴリーとして捉えていないことが明らかであろう。

また、第二十課の「単元のまとめ」には、日本語の文の構造と階層についての知識が紹介されている。日本語の文には、「主題和述題的关系 (題述関係)」、「主谓关系 (主述関係)」、「修饰关系 (修飾関係)」、「补助关系 (補助関係)」などの構造があると説明している。以下では、本論に関連する「主題和述題的关系」と「主谓关系」についての記述を示しておく。

☆《新日》第一冊 第二十課 (P389～390)

(一) 主題和述題的关系

日语句子一般可分为主题部和述题部两部分。讲话时先把中心事项或范围突出地提出来，这是主题部的主要作用。主题部一般用提示助词「は」「も」表示。如：

(※日本語の文は普通主(題)部と述部といった二つの部分に分けられる。語る時は、まず中心となる事項および範囲を突出させて示す。これが主題部の主要な働きである。主題部は一般に提示助詞「は」「も」によって示される。)

○これは私の本だ。

○象は鼻が長い。

主题应该是一提到就能领会的人或事物，所以疑问词(如「なに」「どれ」「どこ」「だれ」等)不能作主题。例如不能说：

(※主題は、一度提示されるとただちに理解される人物あるいは事物でなければならない。よって、疑問詞(「なに」「どれ」「どこ」「だれ」等)は主題となれない。例えば、以下のようには言えない。)

(×) どなたは李先生ですか。

(二) 主谓关系

一般主语在前，谓语在后。

(※普通、主語は前にあり、述語は後にある。)

○春が来た。

ここの「主題和述題的关系」では、主題の文における機能とその意味の特徴については説明しているが、主題の文法的特徴には言及していない。また、「主谓关系」では、一般的に主語が前に来て、述語がその後に来ると曖昧に説明しているだけである。題述関係と主述関係の関わりについても触れていない。

以上、眺めてきたように、《新日》第一冊においては、「は」と「が」の機能・用法については、かなり詳しく説明している。そして、日本語の文の成分や基本構造などの文法知識も紹介している。しかし、同書では、基本的には、「は」を語用論の概念、「が」を文法論の概念として捉えていることが分かる。このような主題と主格の区別の仕方は、主題を文成分と見なさないことに繋がり、結果的には、助詞「は」の機能・用法への理解を妨げ、「Xは～」文の構文的特徴を認識しにくくさせることに繋がっている。また、日本語の文の基本構造が題述関係であるという説明も全く無意味になってしまうであろう。

《新日》第一冊に見られる問題点は、日本語の主題という概念に対する認識が不完全であることによって発生している。主題の文法的地位を認めずに主題と主格を区別しようとした結果、「は」と「が」の機能・用法に対する説明が不明確になってしまったからである。また、当時の中国では、語用論と文法論の観点の違いから中国語の主題と主語を区別するのが主流であり、主題を文法カテゴリーとして捉える研究はまだ少なく、主題構文の類型化などが行われていなかったことも、《新日》における「は」と「が」の提示・説明方法に影響していると思われる。

4.4 今後の日本語教科書への提案

《标日》と《新日》は、「は」と「が」の提示・説明方法にそれぞれの問題点を抱えている。そして、両者の共通する問題点としては、初級でしか「は」を扱わず、中級では「は」の文末まで係る機能や文章・談話における機能に完全に触れていないことである。

ここで、筆者は、以上の分析結果を踏まえ、今後の日本語教科書には、「は」と「が」

についての提示・説明方法に以下の諸点を付加するよう提案したい。

1. 「は」を導入する時は、必ずその主題を表す機能を説明する。また、主題は決して日本語特有の文法概念ではなく、中国語にもあると一言付け加える。日本語の例文とその中国語訳を両方提示する場合は、「これは地図です。(这, 是地图。)」のように、主題とその他の成分の間に「,」を入れ、最初から両者の対応関係を意識させる。
2. 「が」を導入する時は、すぐに主語という用語を使わず、「動作・状態の主体」を表すと説明する。安易に主語という用語を使うと、初級学習者が主題と混同してしまう可能性があるからである。
3. 中級の教科書で、従属節を持つ文が多くなってきた場合は、「は」の文末まで係る機能をまとめて説明し、その主題を表す機能を再確認させる。
4. 中級の教科書でも、文章・談話における「は」の機能を提示し、中国語の主題も同じ機能を有することを意識させる。

上記のように、日中両言語の主題・主格に対する意識と、主題構文の対応関係に対する認識を明確にすることを基本目標とし、教科書の提示・説明方法や教師の指導方法の教案作りに臨めば、「は」と「が」の習得状況が大いに改善できるであろう。

注

- 1) 格助詞「が」の表す意味には、主に動作・状態の主体、動作・状態の対象などがあるが、ここでは、動作・状態の主体を表す主格「が」の場合のみを指す。以下、同じ。
- 2) 中国語では、日本語の主格に相当する成分が「主語」と呼ばれているので、本稿では、中国語について論述する場合、「主語」という術語を使用する。
- 3) 「主賓」とは、主語と賓語のこと。賓語は、概ね日本語の目的語に相当するが、その範囲は日本語より広い。
- 4) 存現文は二つに分類できる。一つは、人・事物の出現、あるいは消失を表す文である（動詞は出現・消失を表すものに限られる）。今一つは、純然たる存在・所有を表すものである（動詞には、「有」「是」等がある）。一般に「時空詞+動詞+名詞」の形を取る。
- 5) bで「(这件事)」を用いるのは、kotoと同じように、動作・状態の主体を表す成分が主題となる可能性を排除するためである。以下、同じ。
- 6) 対訳例は、『中日対訳コーパス（第一版）』（北京日本学研究中心 2003年）より抽出する。各例に作品名を（ ）で記す。以下、同じ。
- 7) 原文のまま。恐らく「滑雪场」の誤りであろう。
- 8) 作成者は宇佐美洋（国立国語研究所 2000）。
- 9) データベースには、作文の添削が公開されていないものもあるが、それらについては、現役日本語教師（日本語教育歴 20年）1名の添削に基づく。
- 10) 作文の添削がデータベースに公開されていない場合は記さない。

参考文献

- 石綿敏雄（1999）『現代言語理論と格』ひつじ書房
 大槻文彦（1897）『広日本文典』日暮里町（東京府）：大槻文彦
 尾上圭介（1973）「文核と結文の枠——「ハ」と「ガ」の用法をめぐって」『文法と意味Ⅰ』くろしお出版

- 金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない——百年の誤謬を正す』講談社
- 菊地康人 (1995) 「は」構文の概観」益岡隆志ほか編『日本語の主題と取り立て』くろしお出版
- 佐治圭三 (1973) 「題述文と存現文——主語・主格・主題・叙述(部)などに関して——」『大阪外国語大学学報』29号
- 城田俊 (1993) 「文法格と副詞格」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 仁田義雄 (1993) 「日本語の格を求めて」仁田義雄編『日本語の格をめぐって』くろしお出版
- 野田尚史 (1996) 『新日本語文法選書1「は」と「が」』くろしお出版
- 益岡隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説—』くろしお出版
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店
- 望月八十吉・望月圭子 (1999) 「いわゆる『多主語構文』の日中語対照」現代中国語研究会編『現代中国語研究論集』中国書店
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 黎锦熙 (1924) 《新著国語文法》商务印书馆 (1955年版)
- 李英哲 (2000) 〈汉语主题与主语之辨〉《汉语历时共时语法论集》北京语言文化大学出版社
- 刘月华、潘文娉、故韦华 (1991) 相原茂等译《現代中国語文法総覧》くろしお出版
- 吕叔湘 (1979) 《汉语语法分析问题》商务印书馆
- 马建忠 (1898) 《马氏文通》商务印书馆 (1983年版)
- 石定栩 (1999) 〈主题句研究〉徐烈炯主编《共性与个性》北京语言文化大学出版社
- 施建军 (2001) 《汉日主题句结构对比研究—兼论主题句的计算机处理》世界知识出版社
- 徐烈炯、刘丹青 (1998) 《话题的结构与功能》上海教育出版社
- Chao, Yuan Ren (1968) *A Grammar of Modern Spoken Chinese*. University of California Press.
- Li, C. N. and S. A. Thompson (1976) "Subject and topic." In C. N. Li and S. A. Thompson (eds.) *Subject and Topic*. Academic Press.
- Tsao, Feng-fu (1979) *A functional study of topic in Chinese: the first step towards discourse analysis*. Student Book Co., Ltd.
- 『中日辞典』(1992) 北京・商務印書館、小学館共同編集 小学館